

## 高等学校における「簿記」の導入指導に関する研究

餅 川 正 雄\*

### 目 次

#### は じ め に

1. 複式簿記を学ぶ生徒の実態
  - 1.1 簿記の導入段階での留意点
  - 1.2 取引の二重性と借方・貸方の指導
  - 1.3 借方・貸方の指導の実態
2. 帳簿記入に関する基礎的な教材
  - 2.1 現金出納帳の記帳練習
  - 2.2 現金出納帳の記帳問題の作成
  - 2.3 簿記一巡の基本手続と実務の大原則
3. 複式簿記の教材研究と指導方法
  - 3.1 複式簿記の教材研究
  - 3.2 複式簿記の導入段階での指導方法
  - 3.3 学校簿記と検定簿記

#### お わ り に

#### は じ め に

初めて“複式簿記”(double-entry bookkeeping)を学ぼうとする人に対して、どのように教えたなら最も効果的であるのだろうか。これは教える側にとって、真剣に考え直さなければならぬ問題である。なぜならば、出発点での教え方、つまり導入が上手くいかないと、学習者に対し無用な時間とエネルギーを課すことになり、場合によっては「簿記は理解できない」と言わせることになるからである<sup>1)</sup>。

簿記は他の科目と比較すると非常にやさしいものである。簿記の機構は、ごく簡単な仕組みのうえに展開しているに過ぎない。簿記の学習者が全体像を理解せず、簡単な仕組みを体得していないため、複雑な感じがするに過ぎない<sup>2)</sup>。

例えば、意欲のある生徒が、簿記の本を買って独学で学ぼうとすると、簿記の最初のページから、いきなり特有の専門用語に蹉跌をきたすことがある。問題なのは、それが原因で学習意欲が大幅に減退するということである。専門用語は、実際に何度も繰り返して問題を解くうちに慣れていくしかない。しかし、最初からそれを丸暗記しようとする、次第に覚えることが多くなってきて、途中で限界だと思ようになる。生徒は、専門用語の意味が理解できていないので、簿記そのものに興味を持てなくなり、最後には投げ出す結果になることが多いのである。簿記は、“簿記一巡の手続”を螺旋階段状(スパイラル方式)に学んでいくので、何度も同じ場面に遭遇し、いつの間にか慣れて、自然に出来るようになるものである。

高等学校でも、簿記の“導入指導”(introduction guidance)は一番の関心事であり、簿記の担当者はそれぞれ工夫をしている<sup>3)</sup>。例えば、“借方”(debit)・“貸方”(credit)という用語をあえて使用しないで、「左(側)」・「右(側)」と言っている教員も多くいる。最初は、取引から「仕訳を切る」訓練を何時間も行う。筆者も仕訳訓練の授業はいくら時間をかけてもよいと考えている。なぜならば、基本的な“簿記上の取引”(transactions in bookkeeping)の“仕訳”(journalizing)を瞬時にできるようにすることが簿記学習の“第一関門”であるからである。簿記学習の“第二関門”は、“決算”(closing accounts)である。生徒が決算手続きを深く理解することが重要である。“決算整理”(closing adjustments)を学ぶ場合、何回か決算の単元があっ

\* 広島経済大学経済学部准教授

て、なぜ“減価償却”(depreciation)や貸倒償却を行うのかを理解できるようになる。これらは“発生主義”(the accrual principle)という概念を理解していないと説明できないものであり、会計や原価計算を学ぶ段階になって納得できることである。

本研究は、高等学校で科目「簿記」の導入段階で、教員がどのように指導していけば効果的であるのかということを、筆者の高等学校での経験を元に考察したものである。

具体的には、次の三部構成となっている。第1に、簿記学習の前提となる計数感覚とは、どのようなものかを考察した後に、簿記上の取引を二面的に把握して仕訳をする際に、借方・貸方を初学者にどのように説明すれば分かり易いのかを検討した。第2に、帳簿への記帳する時の基本的なルールとして何を指導するのか、“現金出納帳”(cash book)の記帳指導を取り上げて論及した。第3に、教員が複式簿記の本質に迫るための教材研究として多くの専門書の中から代表的なものを示すとともに、「学校簿記」と呼ばれる学習指導要領に準拠した教科書によって簿記の指導を行う方法と、「検定簿記」と呼ばれている検定試験への対策を中心とした指導方法について、学校現場の教員の意識と問題点を考察した。

## 1. 複式簿記を学ぶ生徒の実態

### 1.1 簿記の導入段階での留意点

商業高等学校の簿記の授業では、最初に数字の書き方を指導する。生徒の多くは、正確で美しい数字が書けない実態があるからである。見本を見ながらノートに10ページ以上の練習をさせる。筆者の経験では、最初から数字がまともに書ける生徒はいなかった。商業科の教員は、正確で美しい数字が速く書けるように練習させることは、大変重要なことだと認識している。帳簿に書く数字のほとんどは「金額」を表すも

のであり、これが正確でないと帳簿の価値はなくなる。数字は、10個だけであるので、練習すれば誰でも一定の水準に達することができる。また、三桁ごとに位取りの“カンマ”を打つことも指導する。数字を書き終わってから最後にカンマを打つ生徒がいるが、これは誤りである。慣れれば、カンマを見て金額が読み取れるので、大変便利である。千円、百万円、十億円のところにはカンマが付けられる。つまり千円の千倍が百万円であり、百万円の千倍が十億円なのである。

1000	1,000	千円
1000000	1,000,000	百万円
1000000000	1,000,000,000	十億円

ほとんどの生徒は、これまでの生活の中で、数百万円とか、数千万円といった大きな金額に接した経験がない。そこで、簿記の指導では、大きな金額(数字)の“読み上げ”も訓練する。次の金額が読めるだけでなく、漢数字でも書けるようになる必要がある。漢数字は、小切手や手形を振り出す際に、チェックライターを使用しないで漢数字で書く場合があるので、実務では重要である。

¥256,904	貳拾五万六千九百四円
¥8,734,912	八百七拾参万四千九百拾貳円
¥2,645,387,091	貳拾六億四千五百参拾八万七千九百拾壹円

昭和50年代から電卓が普及し始め、その影響で、商業高等学校においても珠算を教える教員が少なくなっていった。筆者の体験では、県教委の指導主事になったばかりで記憶に残っているが、平成5年頃に学校現場では「珠算か電卓か」という議論があり、「その両方が必要である」という意見もあった。しかし、現実の社会は確実に電卓に移行しており、次第に商業高等学校で珠算を指導することがなくなっていった。結果的に珠算で指導していたいわゆる「計数感覚」が身につけていない生徒が増えていくことになっ

たと指摘する教員もいる。しかし、「生徒に珠算をやらせればいい」と主張する教員は、ほとんどいない。珠算で1級に合格するまでにかかる年数は、一般に5年と言われている。ところが、同じ計算問題を電卓で行う場合、約1年で計算できるようになる。小学生が珠算塾に通うことは、意味があるだろうが、高校生になってまで珠算を練習する意味があるのかという疑問が生じる。実務では加算（足し算）がほとんどであるので、電卓も珠算も同じだという意見もある。確かにそうであるが、乗算（掛け算）・除算（割り算）は、電卓の方が格段に便利であることは明白であり、加算や減算も電卓の練習をすれば、かなりのスピードで計算できるようになる。商業高等学校の教員の間では常識となっているが、「最近の生徒は計数感覚が乏しい」ということである。その原因が、電卓の使用によるものではないかと、まことしやかに囁かれている。しかし、電卓のなかった時代には計数感覚が身についていたという実証研究がないので、安易にこの「電卓有害説」を支持することはできない。

「計数感覚」ということで言えば、筆者が商業高等学校で指導していた20年前のことであるが、「5千円の2割引はいくらか？」という質問に答えられない生徒（1年生）が多くいた。これは尋ねられた意味が理解できていないことが原因であった。更に付け加えるならば、「半値」・「八掛け」などという実務の慣用句は、全く通用しなかった。問題の出し方を変更して「5千円の20%はいくらか？」という問題には答えられるのである。20%が「0.2」であることぐらいは知っているので、頭の中で「 $5,000 \times 0.2 = 1,000$ 」という計算をして、答えられるのである。「5千円の2割引は？」どうなるかと言えば、5千円に「0.8」を掛けて、4千円とするのであるが、生徒は質問の意図である「5千円から2割を引いた残りはいくらであるのか？」という意味が理解できずに、ほとんどの生徒が困惑した顔を

する。このような生徒が「2割引きで4千円となっている商品の元の値段はいくらか？」という問題をどうやって解くのだろうか。4千円を「0.8」で割ることになるが、イメージとして、「0.8」で割るということが理解できていない生徒がほとんどである。4千円よりも大きな数字（金額）が算出されるというイメージが掴めないのである。

定価5,000円の2割引の商品の売価は？	$5,000円 \times 0.8 = 4,000円$
定価の2割引で売価4,000円の商品の定価は？	$4,000円 \div 0.8 = 5,000円$

他にも、電卓の場合、実務では「桁違い」という誤りが多く発生する。珠算の場合は、桁違いはほとんど起こらない。珠算では「数字をどの桁に置くのか」ということが重要であり、カンマの位置に注目するのであるが、電卓では「ゼロ」を何回打つかというだけであるので、間違いが起こりやすい。例えば、百万円を入れる場合、珠算だと「ワン・ストローク」つまり、1回であるが、電卓の場合は、「セブン・ストローク」つまり7回電卓を叩くことになる。ゼロを6回入力するのである。

「補数計算」ということも実務では重要である。例えば、「4,368円の商品を買ったお客様が、1万円札を出された。お釣り銭はいくらか？」という問いに即答できなければ実務では役に立たない。電卓などを使わないで、暗算で「5,632円」と即答できるかどうかである。補数計算は、繰り返し訓練することによって身に付けることができる。実は、この補数計算は珠算を習った人は簡単にできるのである。

お客が出されたお札	10,000円	1,000円	5,000円	500円
買われた商品の代金	4,368円	759円	3,025円	293円
店が返すお釣り銭	5,632円	241円	1,975円	207円

簿記の指導においても、計数感覚を身につけさせることは重要なことである。まずは、大き

な数字に慣れさせるということである。数千万円、数百万円という単位の金額は、日常生活では接する機会がないので、慣れていないのが普通である。しかし、簿記は個人商店や株式会社の帳簿を作成する訳であるから、大きな金額が出てくることにも慣れておく必要がある。簿記の専門書や問題集の中には、意図的に金額を3桁程度にしているものを見かけることがある。これは学習者に計算の負担をかけないようにという配慮であろう。しかし、高等学校で指導する簿記の場合は、実務で使われる程度の桁数を使用することが望ましいのではないかと考えている。

## 1.2 取引の二重性と借方・貸方の指導

複式簿記では、取引を二面的に記録する。取引というのは、すべて金銭的な価値の交換のことである。複式簿記では、簿記上の取引を完全に記録するために、貸借両方に記録される二つの要素で捉えることになる。これは“取引の二重性” (duality of a transaction) と呼ばれている。

ここでは、複式簿記の指導における最初の課題として、借方と貸方をどのように指導したら分かり易いのかを考察しておきたい。文部科学省検定済の教科書『高校簿記』<sup>4)</sup>を開いてみると、「簿記では、左側を借方 (debit ; Dr), 右側を貸方 (credit ; Cr) という。」と説明し、欄外に「歴史的には借り・貸しの意味があった。いまでは、勘定口座の左側の欄、右側の欄を示すことばとして用いられている。」と記述している。別の出版社の教科書『簿記』<sup>5)</sup>では、「勘定の記録形式は左右に区分され、左側を借方、右側を貸方という。」となっている。このような教科書で、簿記について興味・関心をもたせ、意味や内容を理解させる指導をしようとするのは、無理がある。教員は、借方を「かりかた」と読み、貸方を「かしかた」と読むことから指導す

る。決して「シャクホウ」とか「タイホウ」と読み間違えないようにさせる。高等学校でも、簿記の導入方法が一番の関心事であり、簿記の担当者は様々な工夫をしている<sup>6)</sup>。借方・貸方という用語をあえて使用しないで、「左 (側)」・「右 (側)」と言っている担当者も多くいるのが現実である。

貸方を「あっち」、借方を「こっち」という呼び方で指導している高等学校の教員や、借方を「アイ (I)」・貸方を「ユー (You)」と言い換えて解説している本もあるくらいである<sup>7)</sup>。

筆者の経験から言えることは、貸方と借方という言葉で説明するよりも、貸方を「原因」と借方を「結果」と言い換えて説明する方が生徒に理解させやすかった。原因や結果という言葉は、生徒もよく知っている言葉であり、現金の出入りが中心となっている簿記の導入段階では、仕訳をイメージし易いと言えよう。

筆者は、高等学校や大学で、借方をイン (In)、貸方をアウト (Out) と指導したり、借方を「現在」、貸方を「過去」と指導したりしてきた。指導する側は、色々と工夫をして生徒が納得できる顔をするまで言葉を言い換えていくことが重要である。社会人の方々を対象に複式簿記の入門的な指導をする場合も、この借方・貸方を理解し納得してもらうことが第一関門である。その際には、借方と貸方を、「表」・「裏」、「運用」・「源泉」、「事実」・「理由」などの言葉で説明し、理解してもらったこともある。

「借方・貸方」の言い換えの例

借方	左(側)	I (私)	In (入)	表	現在	運用	事実
貸方	右(側)	You (君)	Out (出)	裏	過去	源泉	理由

簿記の導入において教員は、専門用語を日常の言葉に言い換える技術や簡単に覚えさせる技術を身に付け、生徒の反応を観察しながら説明する。

商業高等学校でも簿記の学習に特化している



“会計科”では、簿記・会計の授業時間が週に6時間から8時間程度も確保される。上級の検定資格の取得を目標に掲げている学校では、簿記の導入段階から「考えさせる授業」を展開することになる。その理由は、簿記の上級検定にチャレンジさせるためには、単に形式的なパターンを暗記させる指導方法では、複式簿記の本質の理解を望めないからである。高等学校の商業科の教員は、簿記の基礎を確実に身に付けさせる指導技術を研究・実践し、生徒が途中で諦めることのないよう配慮することが求められている。

「簿記」を担当する教員は、根幹となる専門用語の一つ一つの意味や複式簿記のメカニズムについて、分かり易く理解させる方法を先輩の教員から指導を受けたり、生徒と質疑応答を繰り返したりする過程で、自然に指導技術として身に付けている。

筆者は、生徒は決して「覚える授業」を欲しているのではないと考えている。その証拠に、授業の中で「先生！解ったよ！」と目を輝かせて喜ぶ生徒の姿は、高等学校の教員であれば誰もが体験することである。これは、教員冥利に尽きる光景である。「簿記を好きにならせた」と強く願っている商業科の教員は、様々な説明の工夫をして、生徒に「自分は簿記ができるようになった」と実感させるために、定期試験で“100点満点”がとれるように配慮している。特に、最初の段階で「仕訳」が瞬時に切れるように、繰り返して指導する。昔から「簿記は、仕訳に始まり仕訳に終わる」と言われている。筆者は、「簿記は仕訳と決算の二つが重要だ」と言い続けてきた。この二つが理解できなければ、簿記を学ぶ意味はほとんどないと言っても過言ではないだろう。

### 1.3 借方・貸方の指導の実際

生徒は、意味も分からないまま覚えさせられ

ることを嫌う。筆者は商業高等学校の一年生の時に商業簿記の授業で、「なぜ資産の増加が借方なのですか？」という質問をした。簿記のW先生は「そのように決まっているのだ。人は右、車は左と決まっているようなものだ。つまりん事を考えるより覚えればいいのだ。」と言われた。次に私は「仕訳は借方と貸方のどちらを先に書けばよいのですか？」という質問をした。W先生は「どちらでも分かる方から書けばいい。」と言われた。私は、こんないいかげんな事があるものかと思い、それ以後、簿記を教えるW先生が嫌いになって、その先生の授業を全く聴かなくなった。

それから10年以上の歳月が流れ、私は商業高等学校の簿記の教員になって、指導することになった。毎年、かつての私と同じ質問をする生徒がいた。自分の体験から、積極的に質問することは興味・関心が高まっている証拠であるので、ここは慎重に対応しなければならないと考えて、一生懸命に説明したのである。

その時の生徒Yと筆者のやりとりの一部を抜粋して再現しておくことにする。

(生徒はY、筆者はMとして表示する)

Y:「借方と貸方は、どちらが先なのですか？」

M:「その前に、物事を原因と結果の二面から考えるというのが複式簿記なのだ。」

Y:「授業でM先生が何度も言っていたけれど、よくわからないんです。」

M:「Yさんに質問するけど、原因と結果は、どちらが先かな？」

Y:「それは原因が先ですね。結果が後にくるのですよね。」

M:「そうだね。簿記では、原因が右側で、結果は左側にくるのだ。」

Y:「それはどうしてですか？」

M:「それは私にも分からないことだな。でも

キャッチボールのように最初に何かを投げるのだ。そうしたら、何かが入ってくるのだ。右で投げて左で受け取ると考えるのだ。」

Y:「最初に右手でボールを投げる。右側の原因を最初に考えるといいのですか?」

M:「そのとおり。例えば、商品を仕入れて、代金を現金で支払ったとするとどうなるかな?」

Y:「商品を仕入れたというのが原因ですか? 結果として現金が出て行った。」

M:「それは違うな。最初に自分が持っていたものから考えるのだ。つまり最初は現金を持っていたのだよな。これを相手に渡して、引き換えに商品を受け取るのだ。」

Y:「現金が出て行って、商品が入ってくると考えるのですか……?」

M:「そういうことだ。」

Y:「でも、商品が入ってきて現金が出ていくと考えることもできると思います。」

M:「そうとも考えられるが、何もないのにいきなり商品が手に入るかな?」

Y:「要するに、現金と商品を交換するということですよね。」

M:「その通りだ。」

Y:「その場合、どちらが原因かは分からないのではないですか?」

M:「Yさんは、商品が手に入ったのが原因で、結果として現金が出て行ったと言いたいのかな?」

Y:「そうです。教科書でも簿記の問題文ではその順序で書いてありますよ。」

M:「そうだな。原因と結果という言葉がよくないのかもしれないな。過去と現在と考えたら分かり易いかもしれないな。」

Y:「M先生は、今度は、過去が現金で、現在が商品と言いたいのですか?」

M:「そうだよ。右側は過去だな。左は現在と考えたらどうだろう。」

Y:「過去が先で、現在が後にくるから、そうなるのか……。」

M:「そうだよ。仕訳は、過去である右側、つまり貸方から考えるといいのだ。」

Y:「簿記を最初に考え出した人はきっと右利きだったのかもしれないね。」

M:「Yさんは、なぜ、そう思うの?」

Y:「右が先だからです。」

M:「面白いことに気付いたね。私もそうだと思うよ。」

(生徒はしばらく黙ったまま考え込んでいたが、やがて笑顔になった)

Y:「M先生! 解ったよ!」

教員は、説明しながら生徒の表情を見て「解った」という瞬間を見逃してはならない。質問したその生徒(Y)は、現在、税理士となって活躍している。それから、簿記の授業をしていると、毎年のように、同じ質問をする生徒が出現した。簿記の場合、このような導入の段階での説明は、特に重要だと感じていた。

専門用語の意味や本質を簡潔明瞭に解説した教材と丁寧な指導が求められていると言える。したがって、「意味や本質を理解してから覚える」という授業が理想的である。そのためには、教員が複式簿記の基本構造<sup>8)</sup>を深く理解していなければならない。生徒の興味・関心を高めさせ、本質を理解させる方法の一つに、「歴史をひもとく」という指導技術がある。商業高等学校では、中世の簿記の生成の歴史や福沢諭吉の『帳合之法』などの話を簿記の最初の授業時間で行うことが多いのは、その好例である。

## 2. 帳簿記入に関する基礎的な教材

### 2.1 現金出納帳の記帳練習

ここでは、沼田嘉穂氏の『完全簿記教程Ⅰ』

を参照する。第1章では記帳技術の基礎をとりあげ、20ページの紙幅を割いている。帳簿の作成例として現金出納帳の記入例示がある。この例示によると締切手続きが技術的で、簿記の初学者には難しい。ただし、帳簿の作成について詳細に解説している点と記帳練習問題が二問題付け加えられている点で、簿記を初めて指導することになった教員にとっては非常に参考になる専門書である<sup>9)</sup>。

帳簿の記帳方法について、もっと詳しい実務的な専門書としては、宮坂保清氏『新版実務簿記精解（改訂版）』がある。記帳の誤謬訂正の仕方について、例示をしながら詳しい説明がされており、現金出納帳だけで18ページの紙幅を費やしている<sup>10)</sup>。

しかし、高校生や大学生が勉強するには、もっと簡潔で分かり易いものが必要である<sup>11)</sup>。高等学校の教科書よりも分かり易い入門書は、書店でも販売されている。しかし、高等学校の「簿記」教科書の情報量（内容）と同程度のものをコンパクトに纏めた本は、今のところ市販されていない<sup>12)</sup>。

筆者が大学で担当する「簿記原理Ⅰ」の授業中、大学1年生に尋ねてみると50人中、3・4人が小遣い帳（現金出納帳）をつけているというのが実態である。これまでに小遣い帳を付けたことがあるという学生を含めても、5・6人で10%程度しかいないのである。帳簿を付けた経験がない学生に、簿記をどのように指導していけば効果的であるかを考え直さなければならない。

筆者は商業高等学校で15年以上「簿記会計」の指導をしてきたが、簿記の授業で現金出納帳の記帳方法を指導したことはほとんどない。教科書や問題集には最初の所で出てくるが、常識的な範囲で記帳できると考えて省略することが多かった<sup>13)</sup>。

現金出納帳を指導することがあっても、締切

りの方法を示す程度である。実際には、帳簿の締め切り方も色々なやり方があるので、どれを指導するのかを迷うことになる。会計科の生徒には、夏休みの宿題として小遣い帳を付けさせることがあった。生徒には、毎日帳簿を付けていくことの大変さや、実際のお金と帳簿が合わなくなることがあることを実体験させることに役立ったのである。現金の帳簿残高と実際の現金有高が異なる場合、どのように処理するのかという授業の時に、生徒を納得させることができた。

また、商業高等学校では、「総合実践」という3年生の科目で、現金出納帳の記帳を一部の生徒に指導したことはある。簿記の全商検定1級（会計・原価計算の2科目）に合格している生徒もともに記帳できる者は少数であった。つまり、実際に記帳指導を受けない場合、生徒の経験の範囲では、まともな美しい帳簿は作成できないのである。筆者は、実務で会計帳簿を付けた経験があるので、その時の経験や高等学校で教頭の業務として他の先生方が付けた現金出納帳の監査をしたことを思い出しながら、適切な練習問題を作成するしかないと考えている。

筆者は、大学の「簿記原理Ⅰ」の授業で現金出納帳の記帳練習をさせることにした。筆者は、現金出納帳も立派な簿記の学習内容であると考えている。社会人でもともに記帳できる人は少ないのではないかと推測している。その理由は、ほとんどの人は正式に記帳指導を受けることがないからである。実際に、筆者がこれまでに目にした現金出納帳で、9割以上は不完全で修正の必要なものであった。好ましくないのは、一般的な記帳のルールを守っているものの、帳簿と実際の現金を照合していないことが明白な帳簿である。これは、領収書などの証拠書類が整理されていないため、領収書や請求書などの原始証拠と帳簿を突合して監査することができないということである。その他にも、ページ繰

越の方法が間違っていたり、摘要の書き方が不統一で分かりにくかったりするものが多かった。金額訂正の仕方や数字の書き方、締切りの方法などを細かく見ると、完璧と言える帳簿は皆無であった。簿記を教えている高等学校の商業科教員であっても、正しい帳簿記入は難しいのである。「簿記」を指導する教員は、最低でも次に示す「帳簿記帳上の基本的なルール」を理解して、生徒への指導に当たっては意識的に何度も説明を繰り返すことが求められる。

帳簿記帳上の基本的なルール

a	帳簿は自分で作成すること
b	日付の月は、同じ月の場合は省略する
c	摘要欄には要点を簡潔に記述する
d	残高欄は、実際に現金と照合した時に記入する
e	ページ繰り越しの行が必要であり、ページの最初と最後の行を使用する
f	途中で現金の実際有高と帳簿が合わない場合、判明した時点で修正する
g	以前の記帳に金額の間違いが見つかった場合、遡って訂正しない
h	帳簿（補助簿）は、毎月、月末に締め切る
i	“エンピツ” 締めは、合計欄に小さく行の上側に記入する
j	帳簿はすべて黒（又は青）のボールペンで書く
k	線はすべて赤のボールペンで引く
l	数字は全部訂正、文字は一部訂正とする
m	訂正は“見え消し”で行い、赤の複線で消す

多くの商業高等学校の教員は、このような基本的なルールについて記帳練習をさせながら指導しているのである。一般には、このような「枝葉末節なことを指導しなくてもよい」と思われる人がいるかもしれない。しかし、実社会に入ってから指導されるようでは、商業高等学校の価値が問われることになるので、商業教育の担当者は、枝葉末節なことであっても、基礎として確実に身に付けさせたいと考えているのである。教員自身が「現金出納帳」を付けたこと

がなければ、細かな部分の指導は難しいので、教員になってから実際に自分の小遣い帳を付けてみて欲しいものである。

2.2 現金出納帳の記帳問題の作成

商業科の教員は、次に示すような問題を自分で作成する能力が求められる。教員は、自分が商店主になったつもりで、1カ月の現金の出入りを想定しながら作成することになる。勿論、様々な問題集が市販されているので、それらを参考にしながら次に示したような自分のオリジナル問題を作成する能力が必要である。

問題 次に示した広島商店の7月分の取引によって、現金出納帳へ記帳しなさい。  
なお、7月31日で帳簿を締め切りなさい。

1日	前月より現金¥150,000 が繰り越された。
〃	沖縄商店へ商品¥200,000 を売り上げ、代金は現金で受け取った。
2日	商品売上の仲介手数料¥5,000 を現金で受け取った。
3日	従業員広島太郎の出張旅費¥12,000 を現金で支払った。
〃	鹿児島商店から商品¥150,000 を仕入れ、代金は現金で支払った。
〃	鹿児島商店との接待交際費¥20,000 を現金で支払った。
4日	事務用パソコンのプリンタインク¥8,000 を亀山電気店で購入し、代金は現金で支払った。
5日	芸北銀行の普通預金から現金¥150,000 を引き出した。 (現金の実際有高を確認し、帳簿残高と一致していた)
…………… 途中省略 ……………	
30日	現金の実際有高を確認したところ、現金¥3,500 が帳簿よりも少なかった。(不足の原因を調査したが不明であった)
31日	アルバイトの山本花子へ今月分の賃金¥107,500 を現金で支払った。
〃	商工会の会費¥5,000 を事務局へ現金で支払った。

商業科の教員は、一般的な帳簿記入の問題だけでなく、“推定簿記”と呼ばれる問題にも慣れ



ておくことが望ましい。推定簿記というのは、例えば、現金出納帳の記入を見て、どのような取引があったのかを推定するというような問題のことである。他にも、仕訳帳から取引を推定する問題や総勘定元帳から仕訳を推定するような問題も考えられる。

### 2.3 簿記一巡の基本手続と実務の大原則

簿記は、取引を仕訳し、それらを帳簿に記帳したうえで決算を行って、“貸借対照表” (balance sheet) と“損益計算書” (profit and loss statement) を作成する記録計算の技術である。その“簿記一巡の基本手続” (a cycle of fundamental procedures of bookkeeping) を段階的に指導していくのが一般的である。簿記の全体像、つまり“幹”にあたる部分を十分に認識させないで、商品の特殊な販売形態の処理や特殊仕訳帳 (special journal) を指導すると、生徒は自分が何を学んでいるのかという現在地が分からなくなり、いわゆる迷子になってしまいかねない。簿記の全体像 (幹) を理解させたいという順序が大切である。

#### 《簿記一巡の基本手続》

[取引⇒仕訳帳⇒総勘定元帳⇒試算表⇒精算表⇒  
帳簿決算⇒財務諸表]

簿記の指導において、もう一つ大切な前提がある。それは簿記が実学だということである。つまり商店や企業で実際に使われているということである。いくら簿記の原理を学んでも実際に使えなければ何にもならないということである。

実務では、「無駄なことはしない」のが大原則である。様々な無駄なことを省略し続けてきた結果が今の状態だとも言える。筆者は、簿記の導入段階の指導においては、簿記一巡の基本手続とともに、無駄なことをしないということを繰り返し説明することが有効であると考えてい

る。具体的には、会計帳簿には、無駄な文字や赤線は、一つもないのである。学習簿記では、合計線や締切線、区分線、三角線といった線を引くことがあるが、すべて赤線である。簿記ではどんな線でも絶対に黒や青で引くことはない、ということ指導している<sup>14)</sup>。

金額訂正の場合は、“全部訂正”と言って、数字を全部訂正することになっている。金額の上に二本 (又は一本) の赤線を引くように指導する。これがいわゆる「見え消し」という方法であるが、元の数字や文字が見えるように訂正するには、一本線の方が望ましいと思われる。筆者が経験した実務では、一本線で見え消しをしていた。しかも、赤ではなく黒や青で線を引いていた帳簿も見たことがある。それは、黒のペンから赤のペンに持ち替えるのも時間の無駄だと考えたからであろう。

誰が訂正したかを明らかにする意味で、簿記印 (帳簿訂正のための小さな印鑑) を押す。簿記の教科書で、訂正の仕方を説明したものは非常に少なくなっている。学習簿記では、鉛筆を使って解答を書くため、消しゴムで消せばいいからだと考えられる。因みに、税理士試験などの国家試験では、ボールペンを使用することになっている。実務でも鉛筆で帳簿を付けることは、“鉛筆締め”を除いてはあり得ない訳である。

## 3. 複式簿記の教材研究と指導方法

### 3.1 複式簿記の教材研究

商業科の教員は、簿記の“教材研究”をする際に、高等学校の「簿記」教科書を読んで、問題集を解いてみる。教師用の『指導資料』<sup>15)</sup> (一般に「指導書」と呼ばれているもの) もあるので、それを参照することもできる。しかし、授業は、教科書と指導資料だけで展開できるというような簡単なものではない。そこで、教員は、各種の入門書や専門書を読む必要に迫られる。

それは、教科書を使って簿記を指導していると、様々な疑問が湧いてくるからである。生徒からの「なぜ資産の増加が借方なのか？」といった簿記に関する根本的な問いほど答えにくいものはない。言うまでもなく、それは簿記に限ったことではないだろう。どんな分野においても、素朴な質問は、物事の本質を突いたものが多く、簡単には答えられないものである。この困惑は、「学ぶ側」から「教える側」に立った人の宿命でもある。因みに高等学校の「簿記」の教科書は、260ページ程度である。その教科書の情報量は非常に多く、説明文（本文）も高校生向けであるので実に丁寧なものである。教員は、教科書の内容を100%理解できたとしても、実際によい授業を展開することは難しい。新任の商業科教員にとっては、指導するとなると教科書の記述でさえも、納得できない部分があるのが普通である。そこで、最初は、初学者向けに市販されている分かり易い簿記の本を探して読んでみることに<sup>16)</sup>。

教員自身が納得できないことがあると自信をもって指導することができないので、先輩の教員に質問したり、自分で調べたりして理解を深める努力を続けていくことになる。教員にとっては、その努力は自分が日々成長していることの証であり、そのこと自体が楽しいことでもある。筆者も経験したことであるが、長年、教職に就いていると、入門書や教科書を超えて様々な専門書を読んでみたくなるのも事実である。筆者も「“精算表 (working papers)” は作成する必要があるのか？」という疑問が湧いてきたことがある。それは、筆者が経験した実務では作成していなかったからである。

ここでは、複式簿記の本質とは何かを理解するための教材研究として、多少、引用が長くなるが定評のある専門書の中からその一部を抜粋して示しておくことにする。簿記の学問としての奥深さと格調のようなものを感じ取ることが

できるであろう。

### 3.1.1 『近代簿記精義』

1914（大正3）年に発行された吉田良三氏の『近世簿記精義』から借方・貸方の説明部分を引用する<sup>17)</sup>。この書物は844ページの大著で、第二次世界大戦まで簿記の最高権威書として広く読まれたものである<sup>18)</sup>。

「勘定口座の左方及右方を現す用語として簿記にては借方及貸方なる両語が使用され、左方を借方 (Debit or Debtor side) 右方を貸方 (Credit or Creditor side) と云う。即ち 資産 = 負債 + 資本 なる等式の左側に属する勘定の増加欄と右側に属する勘定の減少欄とが借方にして、反対に左側に属する勘定の減少欄と右側に属する勘定の増加欄とが貸方たり。思ふに勘定口座の左右に借貸なる両語を使用することは其起源人名勘定にあり。即ち事業が他人と貸借関係を生ぜし時、其債権債務を記帳するに相手人名を以て表はす勘定に此両語が使用されるに始まる。而して簿記上の貸借は事業を主とせず相手方を主とするものにして、借方とは借主又は債務者を意味し、即ち相手方が事業に債を負ひたる時記入さるる側にして、貸方とは貸主又は債権者の意味にして相手方が事業に債を負はしたる時記入する側たり。斯の如く他人との貸借関係の記録に此両語が使用さるる場合には両語の文字通りの意味を有し居り、即ち左方が借方たる勘定は主格たる相手方が借主即ち債務者となるが故にして、又右方が貸方たるは相手方が貸主即ち債権者となるが故なり。

勘定に用いられている借方、貸方という用語は、相手方本位の用語として用いられたものであるから、記録を行う当方の立場から考えると、ちょうど反対の意味をもつものとなる<sup>19)</sup>。これは、当方を主格におい

で貸借を表現する日本人の観念とは逆に、相手方を主格において貸借を表現する西洋の慣習を反映したものといわれている<sup>20)</sup>。」

### 3.1.2 『簿記原理』

1934（昭和9）年に出版された、黒澤清著『簿記原理』の第1編簿記理論、第1章経済生活に於ける複式簿記の意義、では次の記述で始まっている<sup>21)</sup>。

「複式簿記とは何ぞや。私はこの問題に答へる前に、如何にして複式簿記は発生しなければならなかったのかの根拠を先ず探り求めることにしよう。読者は複式簿記が生成し来れる根源としての経済生活の現実的基礎のなかから、当然複式簿記の定義を自ら帰納することができるであらう。

（途中省略）

複式簿記は中世末期のあのルネッサンスの渦中にあったイタリアで発生した、それは時計や顕微鏡や羅針盤や火薬や活版技術等の発明が続出した社会であった。時計の発明は中世紀の宗教的暗黒からの人間理性の覚醒を意味すると共に、数学的合理的計慮に基いて経済生活が営まれるやうになった時代の推移を暗示するであらう。羅針盤は古き世界の近代的拡大を意味すると共に、印度航路とアメリカ大陸の発見に対する象徴であり、資本主義的企業の世界的進出への出発点を指示するものであらう。火薬の発明は封建制度の没落に対する直接の刺激であり、活版術の発明と共に資本主義勃興の前触であったと云えよう。資本主義社会は斯うした数々の物的な知らせと共にやって来たのであった。然しながら資本主義は斯様な物的発現をなした許りではなくそれと同時に、複式簿記に於て精神的発現をなしたのである。」

### 3.1.3 『新簿記精説（上巻）』

1937（昭和12）年に大学の教科書として初版が出された、片野一郎著『新簿記精説（上巻）』の最初のページは、次の記述で始まっている。

「複式簿記は人知が産んだ最もりっぱな発明の1つである。思慮ある家長は誰しも自分の経済に複式簿記を用いなければならぬ。」これは18世紀末葉ドイツの世界的詩人ゲーテ（Goethe=1749～1832）がその名作『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』の中で簿記をたたえた言葉である。「複式簿記の原理はユークリッドの比の原理と相ならぶべき絶対的完全原理である。それがきわめて簡明であるということが、むしろ簿記を無味乾燥なものにしているのである。もし、簿記の原理が複雑なものであったならば、必ずやしんしんたる興味をよびおこさずにはおかないであらう。」これは、19世紀末葉イギリスの有名な数学者アーサー・ケイレー（Arthur Cayley=1821～1895）がその著書『複式簿記の原理』の序文の中で述べた言葉である。一世にすぐれた詩人と科学者たちのセンスは、複式簿記が人間社会の経済生活における財産の計数的な管理の最良の技術として不朽の文化財たるべきことを明敏に感知したのである。」

ちなみに、この書物は、上巻・下巻をあわせると、897ページにも及ぶ大著である。この『簿記精説』は、難解な用語が多く理解しにくい。かつての簿記学習の定本であり、公認会計士二次試験の受験者の必読の参考書の一つであった<sup>22)</sup>。

### 3.1.4 『簿記会計通論』

泉谷勝美著『簿記会計通論』により、借方・貸方の説明部分を引用する<sup>23)</sup>。

「(1)勘定の左側を簿記上借方といい、右側を貸方という。この用語は今日では左側・右側を示す左右区分の用語として用いられている。

(2)しかし、中世のイタリアでは借方・貸方用語は動詞として金銭貸借を区分する表現法として用いられていた。それは金銭貸借表現法そのもので、その取引が贈与でないことを明言したものである。例えば、Aへ金銭を貸し付けた場合、将来現金収入をもたらすものとしてA勘定の左側に、「Aは、我々が与えた金員何円を我々に返済すべし」＝「Aは債務者＝借方である」と表現された。この「返済すべし」＝借方という表現法は、相手方顧客が借方＝債務者であることを簿記方が宣言したものである。この表現法は、当時の公証人が公正証書に用いた表現法を銀行家や商人が模倣したものにはかならない。(途中省略)

もともと企業の経済活動は原因と結果との二面から把握されうるのであって、ある経済事象が発生すると一つの価値が常に他の価値に移るという相対立する運動が生じる。」

### 3.1.5 その他の参考文献

簿記に関する書籍は、その数が多いだけでなく水準も多様であるので、選定に戸惑う。ここでは、筆者の手元にある複式簿記に関する書籍の中から、高等学校の商業科教員が教材研究に際に参考にしたらい文献(①～⑨)を選定して紹介しておく。

商業科教員として簿記を初めて指導する時に、参考になる簿記の本としては、①城戸宏之著『基礎からの簿記Ⅰ～Ⅲ』<sup>24)</sup>がある。城戸氏は、他にも『ひとりで学べる簿記入門』など多くの簿記の入門書を著し、説明や図解等が非常に分かり易いということで定評がある。日商簿記検

定試験用としては、②加古宜士・渡部裕亘編著『新検定簿記講義3級』<sup>25)</sup>や、③蜷川幹夫著『基本簿記』<sup>26)</sup>などがある。これらは、テキストの内容に沿った問題集(ワークブック)が出版されているので学習しやすい。また、詳しい図解を豊富に示し非常に詳しく解説している本として、④武田隆二著『簿記一般教程』、『簿記Ⅰ』<sup>27)</sup>などが有名である。練習問題の解説という形式で書かれたものとしては、⑤大藪俊哉著『簿記論講〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕』<sup>28)</sup>がある。

以上は、教科書として使用される本である。更に深く研究してみたい教員は、次のような研究書を読めば一層、複式簿記の理解が深まることになる。

複式簿記の生成と発展については、⑥リトルトン著『会計発達史』が有名であり、片野一郎氏が翻訳されている<sup>29)</sup>。複式簿記の機構を原理的に理解するためには、勘定理論・勘定学説というものを調べておくといよい。⑦安平昭二著『簿記詳論』では、23ページに亘って解説されている。「複式簿記ではなぜ貸借複記を行うのか、なぜ損益計算書と貸借対照表では利益が反対側に出るのか、資産・負債・資本・収益・費用はなぜあのような関係に立っているのかなどの問題は、勘定理論をぬきにしては語りえないはずである。」と述べ、独自の勘定理論を提唱されている<sup>30)</sup>。他にも、⑧笠井昭次著『会計構造の論理』のような複式簿記の説明理論について各学説を徹底的に追求した研究書もある<sup>31)</sup>。簿記の理論について、歴史的な経過を研究したものとしては、⑨中野常男著『会計理論生成史』がある<sup>32)</sup>。また、経営史の分野において、日本において江戸期には、まだ複式簿記原理は生成していなかったが、既に鴻池家・三井家・中井家・小野家などの江戸商人は、複式決算を取り入れた帳簿記録を有していたという<sup>33)</sup>。

生徒にとって、明治以前の簿記がどうなっていたのかも興味があることなので、教員として



は調べておくと授業でも役に立つことがある。

### 3.2 複式簿記の導入段階での指導方法

複式簿記の学習で最も重要な項目は、“仕訳”(journalizing)である。すでに述べたとおり筆者は、この仕訳を生徒が、いつでも「瞬時に借方と貸方の勘定科目が言える」ようになるまで、時間をいくらかけても訓練することが最も重要なことだと考えている。資産・負債・純資産、費用・収益の5つの勘定(概念)をしっかりと頭に焼き付けさせることが求められる。逆に言えば、これが出来あがっていないければ、その後の学習は、ほとんど理解できなくなると言ってもよいだろう。

仕訳の指導技術として、結論的に述べるならば、筆者は、最初から詳しい説明をしないで、「右側」・「左側」と言いながら説明すればよいと考えている<sup>34)</sup>。

簿記の授業で最初に「仕訳」の指導をする際には、野球のキャッチボールのように「右手で投げて、左手で受け取る」というイメージをもたせる指導が効果的であることは、多くの簿記の教員が経験している<sup>35)</sup>。

しかし、一般的に簿記学習において、最初に疑問が生じるのは、「借方」と「貸方」という専門用語である。高等学校においては、この用語の由来を生徒に解説しないで、複式簿記の導入指導を行っていることは、先に述べたとおりである。筆者は、大学の「簿記原理」の授業でもこの専門用語の意味を解説しないままでよいのだろうか、という問題意識をもっている。ただし、実際に「簿記原理」の最初の段階で解説すると、学生は簿記が最初から難しいものと感じ、拒否反応を示すことが多い。指導する側としては、初学者が専門用語に戸惑わないように配慮した書籍も多く出版されているので、それらを参考にしながら、高等学校で行っている指導技術を採用して指導することが望ましいのではな

いかと考えている<sup>36)</sup>。

ある程度、学習が深まった段階で、改めてこの「借方」と「貸方」の意味を深く考えさせることで、簿記への関心を一層深めさせることになるのではないだろうか。物事を深く考えて理解しようとする学生や生徒に対して、この借方と貸方の歴史的な意味についての説明を回避して授業を展開した場合、簿記に対する興味・関心を高めさせることは困難と言わざるを得ない。

片野一郎氏によれば、「複式簿記とは、〔貨幣形態計算＝貨幣原因計算〕という公理的二元計算原理にもとづく組織的な計算方法によって、特定の経済単位の管理に属する財産につきその変動の事実と事由を明らかにする簿記法にほかならない<sup>37)</sup>。」と、独特の表現で述べている。このような説明で理解できるようになるためには、余程、深く考え抜いて物事の本質を見極めようとする姿勢と習慣を身に付けていなければならないだろう。

山榎忠恕氏が「もっとも、なにゆえに左側を借方とし、右側を貸方にするようになったのか」と言うこと自体の経緯ともなると、欧米では横書きで左側から右側へ記述していくということと、債務よりも債権を第一義的に考える傾向があるということから、常識的な推論を試みるということが可能であるということとどまり、それ以上のことは判然としない<sup>38)</sup>。」と言われているとおり、根本的な疑問が解決している訳ではないことを教員は知っておくべきだろう。

### 3.3 学校簿記と検定簿記

#### 3.3.1 学校簿記と簿記検定試験

高等学校の授業は、高等学校の“学習指導要領”に沿って作成された教科書を使って進められている。決して簿記検定試験の合格のための授業をする訳ではない。教科書を読ませて解説し、練習問題をやらせるというのがオーソドックスな授業展開である。

「学校簿記」においては、“簿記一巡の基本手続”というものを徹底して理解させる必要がある。取引を仕訳させて、“総勘定元帳”(general ledgers)に“転記”(posting)させ、“試算表”(trial balance)を作成させる。そして、決算整理仕訳や、振替仕訳などを経て、帳簿を締切り、貸借対照表と損益計算書を作成させるという一連の手続きを学習する。

これが「学校簿記」と言われるものである。それでは検定試験の取り扱いはどうなっているのかという疑問が湧いてくる。学校簿記による指導では、検定試験は、学習の目標となるけれども、それが目的となることはないのである。

簿記の導入指導において教員が特に留意すべきことは、最初の段階で、生徒に明確な目標を示すことである。つまり「簿記学習の目標を示す」ことであり、その結果として生徒の学習意欲を高め、持続させることが期待できる。一般に、その学習の目標は、“検定試験の合格”ということになるだろう。生徒にとって検定試験の合格証書は、就職や進学の際に有利なものとして扱われることになるので、有効な動機づけとなることは事実である。

周知のとおり、検定試験というのは、合格レベルに達していれば、誰でも何人でも合格するものである。合格人数や合格率に一定の条件がある訳ではないので、クラス全員が合格することも可能である。そこで、教員は皆が協力し合って教え合い、レベルアップを図るということは何度も話している。筆者の経験でも、「全員合格を目指す」と宣言し、クラスが丸一となって勉強に取り組む雰囲気は、教員から見ても、頼もしく気分のよいものである。生徒自身も簿記検定試験に合格することで、勉強に自信が持てるようになり、目を輝かせて学ぶようになり、他の教科も成績が急上昇したという例も多い<sup>39)</sup>。生徒は、一定のレベルに到達したのだという“達成感”がある。そして、合格したという事実

は、履歴書にも書け、社会的にも評価されるので一層、満足感が得られる。以上は、検定試験の合格を目標とした場合のメリットである。そのメリットを十分に理解している高等学校の多くの商業科教員は、本来の「学校簿記」から離れて「検定簿記」で指導しているように思える。つまり、簿記検定の合格を“目標”とするだけでなく、簿記学習の“目的”にしているのではないだろうか。著者は、検定試験に合格させるための指導だけでなく、検定試験には出題されない重要な部分を丁寧に指導している教員もいることを知っている。また、検定試験に合格しなければ、いくら簿記が理解できていると言っても、社会で通用しないことも理解できる。筆者があえて指摘しておきたいことは、検定合格を強く意識して指導していくと、次に述べるような弊害が生じる恐れがあるということである。

### 3.3.2 検定簿記の弊害

学校現場では、検定試験に合格させるための授業は、「検定簿記<sup>40)</sup>」と言われ、否定的に考える教員もいる。筆者も検定試験に合格することが目的になっては、本来の簿記教育が歪んだものになると考えている。

検定合格を重視して授業を展開する「検定簿記」の場合には、試験として出題しやすい部分が授業の中心となる。授業中に、「ここは簿記検定試験に何度も出題されました(覚えておく必要がある)」とか「恐らくこれは検定試験には出ません(覚える必要はない)」という言葉は何度も口にする。多くの生徒が教員の言葉に敏感に反応してしまい、断片的な知識の習得になることがある。極端な場合は、検定試験に出されないと思う範囲は、意図的に省略してしまったり、検定試験の出題を“予想”して、予想される問題を集中的に指導したりすることがある。これは、いわゆる「検定に振り回された授業」であり、検定試験の出題パターンを暗記させる授業になりやすい。

検定試験は、90分という制限時間と、設問の数、限られた問題用紙といった制約があり、出題者の側から言えば「問題として出したいが、ボリュームあり過ぎるので諦めざるを得ない」ということがある。例えば、「帳簿決算」という学習内容（単元）がある。これは量的に検定試験の問題として出題することが難しいため、ほとんど出題されることがない。しかし、決算の学習において「精算表の作成」や「P/LやB/Sの作成」だけで終了しては、「簿記一巡の基本手続」や「帳簿決算」そのものを理解させることはできない。高等学校の簿記の教科書では、帳簿決算の内容が丁寧に記述され、記帳練習問題まで作成されている。帳簿決算の授業は簡単な説明で済ませ、精算表の作成練習で決算の指導を終えていることがある。結果的に生徒は、「決算とは精算表を作成することだ」と誤解することになる。これは、教員が検定試験の出題に授業を合わせてしまった結果として生じる欠陥であると言えよう。

「検定簿記」の授業は、他にも弊害が生じることがある。それは、検定試験に不合格となった生徒には大きな落胆と失望感が生じるということである。生徒の自信の喪失はそれ以後も長く続くことが多い。不合格になった生徒は「あんなに頑張ったのに報われなかった。自分の能力では合格できないものだ」と思ってしまう。勿論、教員は「次の検定試験で合格できるように頑張る」という生徒に変えていく努力をするけれども、教員の励ましや慰めが生徒の心に届かないこともある。検定試験に合格できなかったという事実は、生徒の心の傷のようなもので、いつかは自然治癒するものである。教員は、生徒に新たな目標を設定させるという指導も、事前に用意周到な準備をしておくことになる。その準備として教員は、意識して、「合格だけがすべてではない」ということを日頃の授業で、話しておかなければならないだろう。

すべての検定試験は両刃の剣である。つまり、検定試験は上手く利用すれば非常に効果的であるが、間違った使い方をすれば危険なものでもある。

## おわりに

本研究は、三部構成となっている。その理由は、学習指導の前提として、「生徒観」・「教材観」・「指導観」という3つの教授方略（teaching strategy）というものがあるので、その観点から考察したいと考えたからである。

1つ目は「生徒観」とも呼べるもので、生徒の実態を理解するために、簿記学習の前提となる計数感覚がどの程度身に付いているのかを考えたものである。

2つ目は、「教材観」と呼べるもので、指導する内容について、帳簿記入の基礎とはどのようなものを明らかにしたもののである。

3つ目は「指導観」と呼べるもので、教員がどのような姿勢・方針で指導していくのかを検討したもののである。

以上の構成に沿って、最初に、①簿記学習の前提となる計数感覚を身に付けさせる内容について、数字（金額）を読む能力や補数計算の能力の必要性について論述した。そして、仕訳の指導をする際には、借方・貸方を初学者に「結果」・「原因」と説明したり「I（私）」・「You（君）」と言い換えて説明したりすることや、取引をキャッチボールのイメージで理解させることが効果的であることを明らかにした。

次に、②帳簿への記帳指導をする際に、どの程度まで指導したらよいのかを示し、具体的には現金出納帳の記帳について、その例題の一部を紹介した。

最後に、③複式簿記の教材研究として学問としての簿記に触れるために、権威ある専門書の中からその一部を引用する形で示すとともに、現在、入手可能な図書で筆者の手元にあるもの

を「その他の参考文献」として紹介した。最後に、簿記の学習において目標となる検定試験について、高等学校の商業科教員がどのように捉え、生徒への指導をどのように行っているのかを明らかにし、検定簿記の弊害を指摘した。

筆者は、生徒に「簿記が得意だ」とか「簿記ができるようになった」と言えるようになって欲しいと願って指導してきた。そのためには、指導する教員の用意周到な準備と授業での分かり易い説明、演習問題の繰り返しということが重要である。時間をかけて学習していけば、誰でも必ず出来るようになるのが簿記である。本研究で述べたような経験から積み上げられた指導方法によって、全ての生徒が「簿記ができるようになった」と言えるようになることを望んでいる。そして、簿記の学習でマスターしたことを実務で活かしていくために、上級の簿記にチャレンジするとともに、財務諸表論や原価計算論、監査論、法人税法などの専門的な分野についても興味・関心が高まることを期待している。

## 注

- 1) 中村 忠 (2002)『簿記の考え方・学び方』税務経理協会, p. 3.
- 2) 山口年一 (1975)『現代簿記精講 (改訂版)』同文館, p. 1.
- 3) 安平昭二編 (1992)『簿記・会計の理論・歴史・教育』東京経済情報出版, pp. 329-341.
- 4) 新井清光・加古宜士他 (2008)『高校簿記 新訂版』実教出版, p. 19.
- 5) 醍醐 聰他編 (2008)『簿記』一橋出版, 19.
- 6) 安平昭二編 (1992) 前掲書, pp. 329-341.
- 7) 大平智利 (2003)『簿記がスラスラわかる本』同文館出版, pp. 12-27.
- 8) 田中茂次 (1999)『会計深層構造論』中央大学出版部, pp. 1-34.
- 9) 沼田嘉穂 (1985)『完全簿記教程〔I〕増補改訂版』中央経済社, pp. 3-22.
- 10) 宮坂保清 (1967)『新版実務簿記精解 (改訂版)』中央経済社, pp. 25-43.
- 11) 袴田正美・袴田幸江 (1997)『経理 勘定科目のことがよくわかる事典』西東社
- 12) 島田頌夫 (1992)『だれでもわかる簿記実務編』高橋書店, pp. 1-176.
- 13) 新井清光他編 (2008)『高校簿記新訂版』実教出版, p. 59.
- 14) 沼田嘉穂 (1985) 前掲書, 中央経済社, p. 16.
- 15) 遠藤耕二他 (2003)『簿記 指導資料』一橋出版
- 16) 福島三千代 (2010)『スィスイ♪簿記マンガみてGO 日商3級』ネットルクル出版
- 17) 吉田良三 (1936)『改訂増補 近世簿記精義』同文館, pp. 71-72.
- 18) 中村 忠・大藪俊哉 (1987)『対談・簿記の問題点をさぐる』税務経理協会, p. 2.
- 19) 山下勝治 (1966)『近代簿記論』千倉書房, p. 36.
- 20) 醍醐 聰 (2002)『会计学講義〔第2版〕』東京大学出版会, p. 32.
- 21) 黒澤 清 (1934)『簿記原理』東洋出版社, p. 1.
- 22) 中村 忠 (2003)『会计学風土記』白桃書房, pp. 115-118.
- 23) 泉谷勝美 (1992)『簿記会計通論』森山書店, pp. 39-40.
- 24) 城戸宏之 (1997)『基礎からの簿記Ⅰ～Ⅲ』同文館
- 25) 加古宜士・渡部裕互編 (2004)『新検定簿記講義 3級 商業簿記』中央経済社
- 26) 蛭川幹夫 (2008)『専門基礎ライブラリー 基本簿記』実教出版
- 27) 武田隆二 (2001)『簿記Ⅰ』税務経理協会
- 28) 大藪俊哉 (1997)『簿記論講〔1〕・〔2〕』中央経済社
- 29) 片野一郎訳 (2002)『リトルトン会計発達史〔増補版〕』同文館
- 30) 安平昭二 (2000)『簿記詳論〔四訂版〕』同文館, pp. 283-306.
- 31) 笠井昭次 (1996)『会計構造の論理〔改訂版〕』税務経理協会
- 32) 中野常男 (2000)『会計理論生成史』中央経済社
- 33) J. H. フラマン, 山本紀生／編訳 (2009)『簿記の生成と現代化』晃洋書房, p. 126.
- 34) 武田隆二 (2008)『簿記一般教程・第7版』中央経済社, p. 18.
- 35) 田中 弘 (1999)『電卓いらずのなるほど! 簿記入門』中央経済社, p. 52.
- 36) 長井敏行 (2009)『独習基本簿記』中央経済社
- 37) 片野一郎 (1999)『新簿記精説 (上巻)―簿記の理論と実務の精講―』同文館, p. 32.
- 38) 山本忠恕 (2005)『複式簿記原理 (新訂版)』千倉書房, p. 21.
- 39) 脇山 昇 (2009)『簿記会計教育論 基本問題の探究 (第2版)』中央経済社, pp. 5-7.
- 40) 中村 忠 (1998)『会计学つれづれ草』白桃書房, pp. 188-190.